



Title	知の冒険：哲学を社会へ連れ戻そう
Author(s)	日本経済新聞
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1998, 2, p. 16-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81733
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

知の冒険——哲学を社会へ連れ戻そう

社会に起きている難題に哲学はどのようにかかわることができるのか。こんな問題意識の下、哲学者、鷺田氏が掲げる「臨床哲学」は、哲学を「現場」に連れ出す試みであり、哲学や「知」のあり方をも問い直す。

——鷺田さんが最近提唱している「臨床哲学」は、哲学をいわば社会の中で「実践の学」としてとらえ直すということですか。

鷺田 臨床哲学とは、社会における「臨床の場面」に哲学的思考を差し込もうという試みです。「臨床」の言葉には医療的なイメージもあり、名称には迷いもありますが、トラブルや困窮の発生している社会の「苦しみ場所」といったほどの意味です。そこで哲学の果たす役割は思いのほか大きいし、哲学だからこそなし得ることがあるのではないかと思います。

対象としては教育、医療、労働、家族生活など、人と人が交わる現場で起こる困難をまずは考えています。例えば医療の現場では、ある患者にとって死なないことが本当に幸せなことなのかどうか、看護にあたる人にもにわかには答えの出せない局面は無数にあります。そこでは「死」の意味が問い直されているわけで、それはまさに哲学者たちが長年取り組んできた問いにほかならない。

今春から私の勤務する大学の大学院に臨床哲学専攻を作りますが、第一段階としてはまず、学問としての臨床哲学を立ち上げます。すでに音楽療法や看護などの現場に携わっている人たちとも研究会を重ねてきました。その後に実際に社会に出ていくという段階がやってきます。

——実際にはどんな方法を採用ことになるのでしょうか。

鷺田 臨床哲学はいくつかの点で、“反哲学的”ともいえる特徴をもっています。一つは、これまでの哲学が「語る」あるいは「書く」哲学であったとするなら、臨床哲学はまず「聴く」哲学であろうとしています。

知人で阪神・淡路大震災後のボランティアに長く出かけていた人に聞いた話です

が、息子が死んだのは自分のせいだと自責にさいなまれている母親がいたそうです。知人はただ聴くことしかできなかったけれど、聴くという形で言葉を受け取ることそれ自体が確かな意味を持つ実感を得たと語っていました。あるいは、精神治療では、まず患者の抱えている困難をしっかりと受け止めるところから始めると言います。もちろん、哲学は治療の学ではありませんが、臨床的な場面での「聴く」ことの力への期待は大きいといえます。

——「現場の哲学」はまさに問題を「聴く」ところからスタートするわけですね。

鷺田 哲学が社会から遊離してきた一因として、私は「聴く」ことの軽視があると考えています。「語る」以上はその聴者がいることを前提としているはずですが、哲学はそのことを忘れてきたようです。例えば「話す」ことについては「言語行為論」などの形で詳しく論じられてきましたが、「聴く」ことに関してはほとんどなかったといっている。近代以降、哲学はいわば研究機関内の学問になり、人々が生きる現場から遊離することになりました。日本に哲学が輸入されたのはすでにそうなった後だったのです。

——いわば社会に対して一方通行的になってしまった。

鷺田 哲学における「聴く」ことの不在は、哲学が「だれに向けて」なされる行為であるのかを問われず、論理の整合性ばかりを追究し、脅迫観念的に体系や一般理論が導き出される結果を生み出しました。生きる上での基本的な事柄を考え詰めるという本来の目的がどこかに置き忘れられてきたのです。

しかし「痛み」であれ、「苦しみ」であれ、「だれが」を抜きにした「苦しみ一般」や「痛み一般」などというものがあろうだろうか。「聴く」哲学はそのことへの疑問です。そして「聴く」ことは互いの単独性、個別性に居合わせることに、最大限の注意を払います。これまでの哲学は初めに一般理論があり、それを個別のケースにあてはめましたが、臨床哲学は個別のケースそのものから哲学的思考を立ち上げるあり方を志向します。個別の「死」の現場抜きに「死の哲学」はあり得ない。

臨床哲学と似た考え方に応用倫理学という、近年アメリカを中心に盛んになってきた潮流があります。ビジネス倫理学や環境倫理学といった形で、現場を対象にす

るわけですが、これにしても個別ケースへの一般的諸原則の適用を問題にするもので、臨床哲学とはベクトルが反対になっている。つまり、これまでの哲学が、普遍的で体系的な「知」のあり方を目指したとするならば、臨床哲学は普遍化できないものにこそ注目します。個別のものを徹底的に突き詰めることで普遍に至る道筋もあると考えています。

——「聴く」ことはまた対話をうながすことになりますね。

鷺田 哲学がソクラテスの「産婆術」という言葉で象徴されるように、対話から生まれたとするならば、「反哲学」と言いながら、臨床哲学こそ本来の哲学の姿だという不遜（ふそん）な思いもあります（笑い）。哲学は人と人との間でかわされる反論や推論の積み重ねで、知恵を集積させてきた歴史がありますが、今必要なのはそういった「知」のあり方ではないでしょうか。

問題発生の際に即した哲学の語り口を探る、そうして問題にひとつの明確な形を与えていくのが臨床哲学の目標です。一個の事例に一般的原則そのものが揺さぶられるような経験として哲学の経験をとらえ直したいと思います。

——最近の世の中の不安な状況がまさに臨床的対応を求めているのですか。

鷺田 ここ一年くらいの大きなニュースの多くの部分が、私たちの文明のあり方を根底から揺るがす出来事でした。例えば脳死や、クローンは「生」や「死」の再定義をうながす出来事です。あるいは神戸の事件などに見られる教育の現場、都市の家族生活の中で起きている問題が象徴するものは、「良かれ」と思って積み重ねてきた営為が最悪の結果を招くというアイロニーです。「豊かさ」や「幸福」の定義を哲学的にきっちり詰めてこなかったことのツケが今、回ってきているのではないのでしょうか。

それに老いの問題、セクシュアリティや民族文化の問題……まるで時代の困難が哲学的な形をとるようになった感じです。ここにきてこれまで自明だと思っていた前提がことごとく崩れ始めたわけで、ゴールは見えませんが、対話や議論の必要性はかつてなく高まっていると思います。

（『日本経済新聞』1998年1月25日 聞き手は文化部 堤篤史）